

教 育 に お け る 発 達 主 義

小 田 武

教育の理論と技術に関する一つの体系をつくり上げるために、教育研究の場合に私は発達主義 developmentalism と名づけるところの一つの立場に立っている。

ところでここにいう発達主義とは、教育に関する諸問題を取扱う場合に、哲学的には人間の本質を「発達」に求めるものであると同時に、人間の発達現象についての科学的理解を基礎にしようとするものである。

教育における発達主義について更に説明するためには、ここで発達という概念を明確にしておく必要がある。私は「発達」development を個人の「成長」growth および「成熟」maturity と「学習」learning との統合的現象として規定する。その場合、「成長」とは個人の 身体の量的な自然的变化であり、「成熟」とは個人の身体の機能における自然的变化である。また、「学習」とは経験・思考・練習によつて個人の存在と行動との価値が増すことである。従つて「発達」とは、個人が身体の量的な自然的变化や身体の機能における自然的变化に対応しながら、経験したり思考したり練習したりする機会をもつことによつて、その存在と行動との価値が増すことをいうことになる。そして存在と行動との価値が増すという場合の評価の基準については、ここでは自由社会 free society を組織することができると個人の内面性 personality からそれを見出すのである。その際、自由社会とは人間の自由を実現するのに必要な諸条件が比較的揃っている社会のことである。また、自由社会を組織することができると個人の内面性とは、自分の個性 individuality を明瞭に認識して自分の個性の確立に努力していると共に他人の個性を尊重していくようなパーソナリティである。

さて、教育における発達主義というものは、各人がこのような「発達」を一生積極的に自覚をもつてつづけていくことに人生の意味を見出す立場である。従つて、教育は年齢の如何にかかわらず常に発達を可能ならしめるものでなければならない。その場合、学校教育の目的は各人の発達が一生確実につづき得るようにその能力を組織的にすることであるが、学校を卒業すると同時に教育が終るのではなく、発達を一生積極的に自覚をもつてつづけようとする時には教育は一生の問題となるのである。

そこで教育において発達主義をとる場合には、教育の目標として、人間の本質が発達をつづけることにあるということについてのすべての人々の理解を促進することが考えられる。そして、発達を一生積極的に自覚をもつてつづけようとする各人の意欲を促進することが考えられる。更に、他の人々が発達をつづけようすることに対して協力しようとする各人の意欲の促進を意図することが考えられる。要するに、すべての人々が自分の発達と他の人々の発達についての理解ならびに意欲をもつことを促進することが考えられるのである。

次に、教育における発達主義は、人間の成長および成熟の段階を直視するものである。人間の成長およ

び成熟の段階を研究することは科学的な仕事であるが、人間の成長および成熟の段階を直視してそれを教育に際して受け入れることには、そこに一つの教育哲学を見出すことができる。すなわち、「人間の自然」human nature を尊重するという立場がそこに存在するのである。その際、「人間の自然」を尊重するということは、教育においてわれわれが成りゆきにまかせて消極的になるという言わば消極主義であつてはならない。むしろわれわれは積極的に或る成長および成熟の段階における人間がもち得る学習の機会が如何なるものであるかを科学的に研究し、そのような学習の機会を人々に積極的に与えるという言わば積極主義の教育哲学の立場に立つのでなければならない。要するに、われわれが人間の成長および成熟の段階を受け入れて「人間の自然」を尊重するのは、われわれが人間の成長および成熟の段階に最も適切な学習の機会を人々に与えるためでなければならない。

また、教育における発達主義は、人間の個人差を見出すものである。そして各人の個人差を科学的に研究すると共に、各人が個性をもつた存在であることを受け入れる教育哲学の立場に立つものである。教育においては、各人が社会生活に正しく適応することができるようになるという意味での教育の社会化 socialization の努力がなされると共に、各人の個性的な発達をはかるような工夫がなされることを必要とする。人々がそれぞれ特色の異つた存在であるという事実を科学的に研究し、そしてその事実を受けいれるところの教育哲学の立場に立つ時、教育の個人化 individualization すなわち教育が各人に最適 optimum のものとなり各人の個性を発達させるものとなるということが要請されてくるのである。

かくして教育において以上のような発達主義をとる場合には、各人が発達を一生積極的に自覚をもつてつづけていくことができるようにするために、家庭教育・学校教育・社会教育が連絡のない在り方をすることを避け、それらの統合が企てられなければならない。そして学校教育においては最も組織的に各人の発達についての指導がなされなければならない。すなわち、学校においては人生の道案内がなされ、各人が自分の個性的な発達を計画し実施し評価していくように学習指導と生活指導とがなされなければならない。そして各人が自分の発達について理解をもつて努力すると共に他人の発達のために協力するように指導されなければならない。しかも各人が自分の発達と他人の発達とを比較して、優越感をもつて自慢したり他人を軽蔑したりせず、或は劣等感をもつてあせつたり卑屈になつたり他人をねたんだりしないように指導されなければならないのである。組織的な学校教育を中心として教育の全般において各人が発達について十分な理解をもち個性的な発達のために計画を立てる機会を積極的に得ることができるようになるということは、教育における発達主義にとつて不可欠のものなのである。

教育における発達主義と名づける立場の根本的な在り方は以上のようなものであるが、更に「小学校・中学校・高等学校における学年末表彰の問題」をとり上げて、教育における発達主義の立場を一層明らかにしようと思う。

学校における学年末表彰の顕著なものは、修業式や卒業式の席上での表彰である。修業式や卒業式は、学校にとつては教育のしめくりをする機会であり、児童生徒にとつては自分の発達の歴史の一時期・一時代を劃する機会であるといふことができる。修業式や卒業式において幾人かの児童生徒の表彰が適切におこなわれると共に、すべての児童生徒の発達がまわりの人々によつて祝福されるという雰囲気がとくに

望まれるのである。

修業式や卒業式に際して、人々の関心の焦点は、児童生徒のうち誰が表彰されるか、誰が式典の諸行事の代表に選ばれるかということにあるようである。人間は社会的に認められたいという要求をもっているので、児童生徒やその両親の関心がこのような点に向けられることは自然の成りゆきである。そこで人々の関心が向けられていることであるだけに、表彰が適切におこなわれた場合にはその表彰が人々に与える教育的効果は大きい。自分の発達歴史の一時期・一時代に顕著な成果をあげることができた幾人かの児童生徒の努力を社会的に認めて更にはげますことは、その子どもにとつても必要であり、それによつてまわりの子どもをもはげますことになる。このような努力を認める方法が適切であれば、修業式や卒業式の席上でおこなわれる表彰は教育的意義をもつのである。その際大切なことは、表彰が「顕著な努力に対する人々の承認と祝福」として与えられ、また児童生徒にその趣旨を理解させるということである。学年末表彰が教育的意義をもつのは、「あなたが大へん努力することができたのを皆はよかつたと思い、よこんでいます」というような祝福の気持が表彰する側にあり、「努力してよかつたと思います。皆さんの祝福を感謝します」というように人々の祝福に対する感謝の気持が表彰される側にある場合である。顕著な努力をした児童生徒の発達をみんなで豊かな気持をもつて祝福するような表彰が教育における発達主義の立場からは望まれるのである。

ところで、努力が顕著である幾人かの児童生徒以外の大多数の児童生徒もそれぞれ何らかの努力をしていっているわけであつて、その努力に対して社会的承認を与える必要がある。それを表彰の形でおこなうにしても他の形でおこなうにしても、修業式や卒業式はすべての児童生徒にとつて自分の発達歴史の一時期・一時代を劃する機会であるから、児童生徒の発達に対するまわりの人々の祝福はすべての児童生徒に均等であることが求められる。そして、修業式や卒業式において児童生徒が友人の発達を大いに祝福するような気持をもっていることが大切であり、両親もまた自分の子どもばかりでなくその友人の発達をも祝福する気持をもつていてそれを積極的に表現することが必要とされるのである。

修業式や卒業式が児童生徒にとつて自分自身の発達歴史の一時期・一時代を劃して記念するところのものになると共に友人の発達をも祝福する機会であるようになるためには、平素の学校教育や家庭教育によつて、児童生徒が自分の発達について理解をもつて努力すると共に、友人の発達のために協力する態度をつくり上げていかねばならない。すなわち児童生徒が自分の個性の発達に対する努力、友人の個性の発達に対する協力、集団の発展に対する寄与をつづけていくことが大切である。その場合とくに友人との協力や集団への寄与が強調されるべきである。社会にははげしい競争があるから、児童生徒が種々の競争を正しく処理することができるようになる必要はあるが、教育の場がはげしい競争の場であることは望ましくない。教育の場においては、表彰が競争を過度に刺激するようになることを避けながら、個性を尊重し合つた友人間の協力が相互に祝福する気持を強めていくように平素から児童生徒を指導することによつて、学年末表彰が競争的報賞的なものではなく記念的祝福的なものであるようにすることができるのである。

学年末表彰の方法について更に考察するならば、一つの賞でいろいろなことをまとめて表彰するところ

の全般的優等賞のような総合賞を与えるのはよくない。一定の目標の実現に顕著な努力をした場合に、何が表彰されているかということが明確であるような努力賞を与えるのがよい方法である。すべての児童生徒に何らかの目標に対して努力するように奨励しておいてすべての児童生徒のそれぞれの努力点を表彰するところの努力賞を学年末にみんなに与えることによつて、児童生徒が競争をめざして不当に競争することを避けることができる。顕著な努力をした児童生徒を賞讃する意図で努力賞を与える場合でも、またみんなに努力を奨励すると共に発達を祝福するという意図で努力賞を与える場合でも、学年末表彰の方法としては望ましいものである。そしてみんなに努力を奨励する努力賞は学年末に通知簿に添えて渡し顕著な努力を賞讃する努力賞は修業式や卒業式の席上で与えるという方法によつて、すべての児童生徒の努力に対して均等な祝福をもつて承認を与えながら顕著な努力に対しては更に特別な承認を与えることができる。

表彰に際して賞状のほかに賞品を与えることは、学年末表彰の場合には望ましいことではない。努力は一定の目標を達成したという事実ないしは目標達成から生ずる満足の気持によつて報われるべきものであつて、努力と賞品とが結びつくことは避けなければならない。そこで学年末表彰の場合に、賞品は全廃してすべての児童生徒に祝福のしるし・記念のものを与えるという方法をとるべきである。学校・教育委員会・PTA・有志などから出される費用をまとめて、すべての児童生徒にずつと後になつても思い出となる程の祝福のしるし・記念のものを与えることは、卒業式の場合にはとくに必要となるのである。いわゆる外部賞のようなものも賞の形で与えられるのではなく学校が中心になつて祝福のしるし・記念のものを与えることに周囲が協力するという形をとることによつて、記念的祝福的な学年末表彰を支持する役割を果たすべきであり、そうすることによつて民主的な教育の在り方を実現することができる。

なお、現在学年末表彰としては皆勤賞・精勤賞が最も多くおこなわれているが、その場合表彰の基準が比較的明確であるが故におこなわれるのである。けれども皆勤賞・精勤賞が出席努力賞という性格をもつところから、健康上無理をして出席したり風邪を友人に伝染させても出席するということがあれば、健康教育・公衆衛生という観点からこれらの賞を検討しなければならない。表彰する精勤の程度について合理的な基準を考える必要がある。

学年末表彰の方法について努力賞を中心にして考察をすすめてきたが、いろいろな努力賞を与える場合に、児童生徒が与えられた諸条件の下にそのような諸条件で普通に達成されるよりもより以上のものを達成することが努力の意味であるとすれば、出席努力賞にしても学習努力賞にしてもそのほかの努力賞にしても達成度を判定する方法を必要とするのである。その場合、厳密な判定は困難であるとしても、均等な祝福を与えながら努力をできるだけ適確に承認していくことによつて、教育における発達主義の立場を示すことができるのである。